

第2章 研究の実際～日々の生活の中から～

1. 友達とかかわり合いながら自分が創る自分の生活

松中 佳子

事例1 「ペットボトルも家に持って帰っていいからね」

7月16日（月）

1年生が遊戯室に来て、アサガオを使った遊びを教えてくれていた。1年生の男の子達が数人でペットボトル片手に3歳児保育室までやってきた。

小学生A 「色水つくりたい人」

小学生B 「こんなふうに水をちょっとだけ入れて、あとアサガオを入れて振るの」

小学生C 「あんまり水を入れすぎると、だめだよ」

小学生A 「やりたい？」

集まってきたうさぎ組の幼児達に話しかけるが、幼児達はその小学生達と水の色が変わる様子を圧倒され、ポカンと口を開けて見ているばかりだった。教師がその様子を少し離れて見ていると、同じように少し離れて見ていたA児が、教師の側に近づいて来た。大きな声を出したり活発に動き回る友達の様子をいつも少し離れて静かに見ているA児なので、小学生が怖いのかと思って見ると、嬉しそうな表情で小学生のすることを見ている。

教師 「A児ちゃんもやってみる？」

A児 「うん」

そこで「この子もしてみたいんだって」と言ってA児を連れていくと、3人がかりで色水のつくり方を教えてくれた。

小学生A 「ペットボトル、持ってる？」

A児 「(首を横に振る)」

小学生B 「じゃあ、これ（自分が持っているペットボトル）あげる。そしたら、ここに水を入れて、アサガオ入れて・・・」

A児は小学生のすることを嬉しそうに見ていた。そして、きれいに色がついた水を見えます嬉しそうな顔になった。色水ができると、小学生Bはちょっとかがんで、A児の目線に合わせて話しかけた。

小学生B 「はい、これあげる。ペットボトルも家に持って帰っていいからね」

A児 「(消え入りそうな声で) ありがとう」

その後、A児はずっとペットボトルを大事に抱え、家に持ち帰った。そして次の日もそのペットボトルを持って登園してきた。

<考 察>

○幼小の連携について

1年生は「こんなことができるんだぞ」という様子で、自慢げに色水をつくって見せていた。3歳児は、小学生が自分達の遊びの場（保育室）にやってきて遊びを展開するという様子を、少し圧倒されて見ていた。こんなふうが始まったかかわりであるが、これから2つの変化がみられた。一つはA児の変化、もう一つは小学生の変化である。A児は3歳児の集団の中ではまだ自分の思いを出せない幼児であったが、小学生が楽しそうにアサガオの色水をつくっている様子に興味をひかれ、教師と一緒にかかわっていった。はじめは小学生の問いかけに対して首を振ることしかできなかったA児が「ありがとう」と言葉で気持ちを伝えている。この言葉は、色水だけでなくペットボトルまでも家に持って帰っていいと言ってくれた小学生の思いやりに対して出た言葉であろう。一方、最初は自分達の色水づくりを楽しむだけであった小学生も、A児とかかわるうちに、自然にかがんで、A児の目線に合わせて話しかけるようになっていっている。相手が幼児だからこその変化であろう。そしてこのような思いやりをもった優しい小学生の姿が、3歳児がこれから育っていく上でのモデルとなっていくのだと思われる。

このように幼小が交流する場では、校種の違いが有効に働くことが予想される。そこで、今後は小学生から受け取るばかりでなく、幼児の姿を小学生に丁寧に伝え、返していくことが大切だと思われる。そして教師間で情報交換をし、心の育ちをつなげていく連携を目指していきたいと考える。

<指導計画の見直しに向けて>

- ・小・中学校との交流の場はこれまでに年に数回あったが、小・中学校の行事の都合で日程が決まることがほとんどであった。そこで毎年決まった時期に交流するのであれば幼稚園としてのねらいなどを考え、小・中学校に伝えて共に取り組んでいく必要があるのではないかな。
- ・この事例の次の日、3歳児の多くが色水づくりを楽しんだが、中には「昨日のお兄ちゃんと同じ形のペットボトルが欲しい」と言う幼児もいた。そのままそっくり真似たいという3歳児ならではの思いであると思われるので、このようなモデルの重要性を考慮した上で素材などを準備する必要がある。



デンの下のままごとコーナーに家をつくり、B児、C児、D児、A児、E児、F児、G児がガオレンジャーごっこをしていた。

B児 「僕、ガオイエローね」

D児 「僕もガオイエロー」

F児 「僕、ガオシルバーになる」

みんなそれぞれなりたいものになって遊んでいる。しばらくして、場を離れていたG児が戻ってきて「ガオイエロー」とポーズをつけて遊びだした。するとそこでB児と何やら言い合いがはじまり、その家から出てきて取っ組み合いの喧嘩がはじまった。二人とも怪我をしそうな勢いだったので、間に入って止めた。

教師 「ちょっと待って。一体どうしたの？」

B児 「だって、だって、僕がガオイエローなんだよ」

G児 「バカー！」

教師 「G児ちゃん、何がバカなの？」

G児 「だって、F児ちゃん、ガオイエロー」

B児 「違うの。僕がイエローなの」

G児 「お前、バカ！」

教師 「お前じゃないでしょ。この子はB児君だよ。B児君がガオイエローで、G児ちゃんも、ガオイエローで、ガオイエローが二人いるんだ」

B児 「だめなの。だって、この子、はじめガオブルーで、僕、イエローだったもん」

教師 「G児ちゃん、そうなの？」

G児 「うん・・・バカー！」

G児はテラスへ走って行って、テラスにいるS児達を相手に「ガオイエロー」と言っている。B児はテラスの方をしばらくじっと見ていた。B児が何を思っているのだろうと思いながら、教師もB児のそばで一緒にG児の様子を見ていた。するとB児がふと「イエローの方が好きになったのかな？」と言った。教師が「そうなのかもしれないね」と言うと、B児はにっこり笑って、ガオレンジャーの家に戻って行った。

<考 察>

○3歳児のトラブルについて

これまで一つの遊びの中で誰が何になっているかあまり気にせず、自分のなりたいものになって遊んでいた幼児達が、役を決めたり一緒に遊んでいるという仲間意識をもったりしながら

遊ぶようになってきている。そこでこのトラブルが起きたのだが、このトラブルを通して、二つのことを考えさせられた。

一つは、幼児の思いの橋渡しの大切さと難しさである。事例のB児はどのようにしてG児がガオイエローになったらだめなのかを相手に分かるように説明しているが（自己表現しようとする育ち）、G児はガオイエローになりたいけれどだめだと言われた時の思いを「バカ」という言葉でしか表現できないでいる（自己表出する育ち）。幼児の育ちや表現の仕方は様々であるので、まずは自分なりに表現しようとする姿を応援し、状況を確認させることが大切ではないか。そして教師がうまく橋渡ししようとするのではなく、ゆさぶりをかけ、思考できる状況をつくっていくことも大切であると思われる。

もう一つは、他者理解のスタートは自分からスタートするということである。B児の「イエローの方が好きになったのかな」という言葉は、自分もガオイエローが好きで自分も体験したことであるからこそ発せられた言葉であるのではないだろうか。このように、自分が譲るわけでもなく、後から仲間に入れるわけでもないが、自分の体験をもとに相手の思いを感じる経験を積み重ねていくことで、相手の思いに共感できるようになるのだと思われる。

<指導計画の見直しに向けて>

- ・平成7年度作成の指導計画の中には、トラブルの当事者についての援助が明記されているが、3歳児なりの育ちの中でトラブルを起こした当事者だけでなく周りの幼児との関係性を意識した援助のあり方を考えていく。

事例3 「ねえ、どこにおもしろいものあるの？」

10月23日（火）

参観日のことである。保護者には自分の子供の観察記録を頼んであった。そのためか、いつもとは違い、子供達から一歩離れて参観する保護者が多かった。

保育室のデンの下では、男児が数人で基地ごっこを楽しんでいて、「お家に包帯を巻いているの」と言いながら家にビニールテープをペタペタと貼っている。その様子を見て、保護者数名と副園長が話していた。（内容は、男の子がままごとに入るとダイナミックになる・動きが出ておもしろくなるなど）すると、その話を聞いていたD児の母親が突然その場を離れ、テラスでトレーラーごっこを楽しんでいたD児の所に行き、何やら話し始めた。何を話しているのかな、と思って後をついて行ってみると、D児がキョトンとした表情で母親に促されてウレタン積み木から降りて、保育室の方に歩いてきた。教師と目が合った母親は「すみません」と慌ててその場を離れようとしていた。D児は不思議そうな表情で教師に聞いた。

D児 「ねえ、どこにおもしろいものあるの？」

教師 「おもしろいものって？」

D児 「ママがこっちでおもしろいことしてるって」

教師 「ええっ？」

D児 「ねえ、どこにおもしろいものあるの？何がおもしろいの？」

教師 「うーん・・・何のことかなあ？」

D児は保育室に入ってぐるっと周りを見回したが、すぐに戻ってきて「何にもおもしろいもの、なかった」と言ってトレーラーごっこに戻って行った。

<考 察>

○家庭との連携について

この日は観察記録をとってもらっていたため、子供に必要以上にかかわることなく、遊びを眺めるような形で参観している保護者がほとんどだった。そのためか、D児の母親のとした行動はとても目立って見えた。

D児の母親は、自分の子供が参加していない場面を見、その場面について副園長が話しているのを一生懸命聞いていた。そして、違う所で遊んでいる我が子に「おもしろいことをしている」と誘いかけている。教師がおもしろいと言っている場面に我が子も参加させたいという母親の思いが読みとれる。しかしトレーラーごっこに没頭していたD児は、母親の誘いかけによって遊びを中断させられてしまっている。そして保育室での基地ごっこは、母親には「おもしろいこと」であっても、D児にとってはおもしろいことではなかったのである。

3歳児、特に長子の保護者は初めての子育てということで迷いが多々あると思われる。その迷いに共感しながらも、その子にとって何がいいのかを共に考えていく場が必要であると思った。

<指導計画の見直しに向けて>

- ・家庭と連携しながら共に幼児を育てていく意味で、保護者が園に来やすいような状況をつくり（ボランティア・校医との談話など）教師自身が保護者との絆をつくる努力をしながら、具体的な場面で、子供の育ちに何が大切なのかを共に考えていく場をつくっていききたい。

事例4 「球根植えるのって大変なんだねー」

11月30日（金）

肌寒く、雨が降ったりやんだりしている日だったが、晴れ間を見てチューリップの球根を植えることにした。幼児達は一人一つずつ球根をもち、ケヤキの木を囲むようにして身をかがめて土を掘りはじめた。

H児 「ああ、固い。なかなか掘れない（土を手で払うように掻いている）」

教師 「こんな風に手をスコップにして掘るんだよ」

I児 「パワーショベルだよ。パワーショベル」

教師 「本当だね。パワーショベルみたいだね」

D児 「あーあ、爪に土が入っちゃった・・・」
 H児 「ああ、僕もだ」
 J児 「手が冷たい。真っ赤だよ。ちょっと痛いなあ・・・」
 教師 「タッチちゃんの手って、強い手だね。真っ赤になるまで働いてる」
 J児 「うん！もうこんなに深くなったよ（嬉しそうに言う）」
 D児 「ああっ！色（土の）が変わった！」
 K児 「本当だ。わあ、すごーい」
 L児 「ねえ、ねえ、こっちも色（土の）が変わったよ」
 D児ら 「うわーっ、本当だー。こっちの色と似てるね」

ケヤキの木の下のあちらこちらから、「こっちも色が変わったよ」などと楽しそうな声が聞こえてきた。球根を植えた後、

M児 「球根植えるのって大変なんだねー」
 N児 「本当だね。でもお水は気持ちいいね」
 O児 「土は冷たかったけど、お水は温かいね」
 P児 「本当だー、お水温かいー」
 教師 「わあ、本当だ、温かいね」
 P児 「お水が温かいって変なのー（笑）」
 D児 「きれいなお花、いっぱい咲くといいね」
 H児 「絶対咲くよ」
 P児 「私は赤がいいなあ」

と言いながら、水の温かさに驚いたり花が咲くのを楽しみにしたりしながら手を洗っていた。

<考 察>

○自然の中で体感することの大切さについて

チューリップの球根を植える活動を予定した時、穴を掘るためのスコップを準備していた。しかし4歳児と一緒に球根を植えた養護教諭から、手で穴を掘るという経験が幼児達にとって良い経験となったことを聞き、3歳児にも意図的に道具を使わずに植えさせてみることにした。これまで土を触りたがらなかった幼児が土を触るきっかけをつくりたいというのが大きな意図であったが、実際道具を使わずに球根を植えてみて、2つのことに気付かされた。一つは、教師の予想以上に幼児達がいろいろな感覚（硬い、冷たい、温かい、痛い、気持ちが良いなど）を刺激されているということである。ここで体で直に感じたことが共通の話題となり経験となに残っていたように思われる。道具が溢れている日常の中で、自分の体を使って様々なことを感じることの大切さを再確認した。

もう一つは自然の変化が関係を育むということである。この事例の中で幼児達は、①土の色が変わる、②土は冷たいけれど水は温かい、という2つの自然の変化を体験した。どちらも偶然的の発見ではあるが、このこと（自然の変化）がきっかけとなり友達とのかかわりが生まれていることが見えてきた。

自然とのかかわりの中で、様々な発見がある。その発見を共通体験できる場を、これからも幼児と共につくっていききたい。

<指導計画の見直しに向けて>

- ・3歳児なりに共有体験できる場・体感できる場を意図的につくっていく時に、自然の変化が関係を育むことが見えてきたので、この時期球根を植えるということに意義があることも見えてきた。保護者との連携という点や、球根（芽や根）の変化に触れるという点で、家庭を巻き込んだ水栽培なども計画していきたい。

事例5 「ねえ、あの、あれ出して」

1月15日（火）

久しぶりに暖かい日になり、Q児やP児、R児らは元気よく裸足になって砂場で遊び始めた。暖かいとはいっても、冬の晴れ間ということもあり、砂場にいるのは保育室が砂場に面している3歳児だけで、他の学年の姿は見えなかった。バケツに水を入れ、砂場に流して遊んでいたQ児が、教師の姿を見つけてやってきた。

Q児 「ねえ、あの、あれ出して」

教師 「あれって、何？」

Q児 「あの、ここ(水道)に付けて、こうやってお水流すやつ(水の流れを手で示す)」

教師 「ああ、パイプのことかな？」

Q児 「そう、パイプ」

教師 「だったら、こっち（砂場用具が置いてある倉庫）にあるよ」

教師はQ児と倉庫に行き、パイプ（直径10cmくらいの塩ビパイプ）と竹の樋を探して持ってきた。すると、Q児は10月に4歳児がしていた遊びをそっくり真似て、樋を水道の蛇口につけ、その樋のもう一方の先にパイプをつなげて水を流そうとしはじめた。しかし、思ったようにうまく行かず、何度やってもパイプが樋から離れてしまう。それでもQ児は何度も何度も樋を付け直したりパイプと樋の位置を変えてみたりしながら、水を流そうとしていた。その様子を見たG児やS児、R児らも代わる代わるやってきて、「ここから流れてる」などと言いながらQ児と一緒に水の流れる様子を喜んで見ていた。G児らはすぐに他の遊びに興味に移りそちらに行ってしまったが、Q児は友達がいなくなっても、1時間近くも一人でパイプの下にバケツを置いたり、パイプを2本つなげてみたりしながら、水の流れる様子を一生懸命見ていた。

かたづけの声がかかった時、バケツの代わりに持ってきたおもちゃのダンプカーの上にうまく筒が乗った。

Q児 「これで完成だ」

Q児は満足そうにかたづけ始めた。



<考 察>

○3歳児にとっての遊びについて

この事例で、Q児がこのようにじっくりと遊びに取り組めたのはどうしてなのかを考えてみたい。

まず、①組み合わせのおもしろさが考えられるだろう。塩ビパイプ2本と竹の樋でいろいろなつなげ方を考えて試行錯誤できる状況があった。次に②自然（水）が素材であったことも考えられる。水の感触を味わいながら流れの変化を楽しんでいたのではないだろうか。そして③一人でじっくりと遊ぶことができる環境があったことも考えられる。暖かい日には4、5歳児も一緒に遊んでにぎわう砂場であるが、冬の晴れ間ということで、3歳児しかいなかったという状況があったことも意味があるのではないか。そして④過去に4歳児が遊んでいる様子を見たという経験が一番大きな要因になっていると思われる。4歳児というモデルがいたため、遊びのイメージがつかみやすかったのであろう。そして⑤そのモデルのしていることを読みとって取り込んでいける力がついている3学期であったということも考えられる。

このように考えてくると、遊びを豊かにするためにはモデルの存在が大きいことがわかる。3歳児にとってこの時期、4、5歳児があこがれの存在となり、4、5歳児の遊びが伝承されていくのである。

<指導計画の見直しに向けて>

- ・ 4、5歳児の遊びが伝承されていくように、異年齢との遊びのつながりを計画的に考慮していきたい。

事例6-① 「私、練習大好き。またしたい」

2月5日（火）

今日も牛乳を飲んだ後、のびのび表現会に向けて劇の練習をすることになった。すると、いつもはあまり自分の思ったことを口にしないT児が、ニコニコ顔で教師のところにやってきた。

T児 「(小声で) 先生、私、練習好き」

教師 「そう！T児ちゃんもなんだ。先生も練習好きだよ」

T児 「だって、楽しいもんね」

教師 「ねー。さあ、劇、始めようか」

T児 「(大きな声で) うん」

劇の配役が決まって1週間が経っていた。仲良しのV児と一緒にねずみ役になったT児は、これまでの練習で、出番になると緊張した表情でセリフを言っていたので、“楽しい”と感じていたとは驚きだった。

劇が始まり、舞台の袖で待っているT児の様子を見ると、一生懸命友達のすることを見ている。そしてねずみ役の出番になった。「チュウチュウ」と言いながらピアノに合わせて出てきたT児は、消え入りそうな声で「やったー」というセリフを言った。

教師 「もっと大きな声で“やったー！（動作をつけて）”って言ってごらん」

T児 「(大きな声で教師の真似をして) やったー！」

教師 「わあ、すてきなねずみさんだ」

T児は真っ赤な顔をして嬉しそうである。練習が終わってから、T児に言った。

教師 「T児ちゃん、大きな声でお話してたね」

T児 「うん。私、練習大好き。またしたい」

教師 「じゃあ、また明日もしようか」

T児 「うん」

T児は嬉しそうな表情で、弁当の準備をしに行った。

事例6-② 「いやーっ！」

2月19日（火）

T児、U児、V児が、劇で友達が使っていた粉雪役の衣装を身に付けてままごとをしていた。昨日（表現会が終わった翌日）もT児は同じ衣装を身に付け、したい遊びをしている間中、一人でじっくりと粉雪のイメージを楽しんでいた。普段、友達に誘われて遊ぶことはあっても、自分からはなかなかしたいことが見つからないT児にはめずらしいことだったので、嬉しく思っていた。

かたづけになり、「そろそろおかたづけしよう」と声をかけていた時、ままごとの場所から「いやーっ」という大きな声が聞こえてきた。見ると、いやと言っているのはT児だったので、とても驚いた。

T児 「いやーっ！（ニコニコしながら）」

V児 「(T児の真似をして) いやー」

教師 「あらあら、おかたづけするの、いやなの？」

V児 「うん、そうだよ。だって、おままごと、楽しいもんねー」
T児、U児「ねーっ（嬉しそうな表情で）」
教師 「わあ、そんなに楽しかったんだ。先生も一緒にしたかったな。じゃあ、また明日も、続きするのにしようか」
T児ら 「そうしよう。また、明日続きしようよ」

と言いながら、楽しそうにかたづけはじめた。

<考 察>

○T児の姿を通して

これまで自分の思いをなかなか表現できず、ましてや幼稚園の中で大きな声を出したことなどなかったT児が、事例のように「練習大好き」と言ったり、教師のかたづけの声かけに対して大きな声で「いや」と言ったりした。この変化には、のびのび表現会に向けての活動の中で経験したことが大きく影響していると思われるが、ここではなぜT児が自分の思いを言えるようになったのかを考えてみたい。

一つには、劇の練習を通して、なりたいものになって表現する楽しさや大きな声を出す快さを味わったことが考えられると思われる。仲良しのV児と同じ役であったことや教師に認められたことで自信がもて、ますます表現することが楽しくなったのだろう。そしてその楽しさが、普段の生活の中で“粉雪になる（したい遊びを見つける）”“大きな声で自分の思いを表現してみる（まだ遊びたいから、かたづけはいや）”という姿につながっていったと思われる。

また、劇の練習のもつ特質も影響していると思われる。劇の練習は毎日同じストーリーや配役で繰り返されるものである。（もちろん、その時によってハプニングが起きたり動作やセリフに変化があったりして、前にした劇と全く同じものになることはないが）T児は同じこと（劇の練習）の繰り返しという安心感の中で、大きな声を出すという自分なりの目的や、明日も練習するという見通しが持てたのではないだろうか。そして同時に、少しずつ変化するおもしろさも感じられ、「練習大好き」という言葉につながったのだと思われる。

このように、表現会に向けての活動は、自信をもったり繰り返しの中での変化のおもしろさを感じられたりする機会となり、T児にとっては大きな育ちにつながったと思われる。

<指導計画の見直しに向けて>

- ・3学期の生活の中の大きな部分を占める表現会に向けての活動であるが、その練習を通して、その幼児なりの成長の節目となるようにしていきたい。
- ・表現会の時期が友達関係ができつつある3学期であったため、同じ学年の中でもモデル機能が働いたり、同じ役の友達と一緒にする楽しさを感じられたりしたのだと思われるので、3学期に表現会をすることにも意義があることが見えてきた。